25

近世日本鍼灸史における『阿是要穴』の意義

杉浦　雄・篠原　孝市

元禄十六年（一七〇三）に刊行された『阿是要穴』（一名「鍼灸阿是要穴」）五巻は、江戸中期の著名な医家・岡本一抱（一六五四～一七一六）の著した阿是穴（経外奇穴、奇輸）に関する鍼灸書である。現在では、江戸期に著された鍼灸書中のありふれた一書と見られがちであるが、近世日本鍼灸史の流れの中においてみるならば、本書の持つ独特の位置は明らかである。

本書は、冒頭で「阿是を弁ず」と題して書題と著作の動機について述べ、次に穴法の紹介と解説を行い、末尾に「鍼灸の疑義を弁ず」と題された二十三篇の附論を置く構成をとっている。

本書の書題にも使われている「阿是穴」とは、本来、圧痛点としての治療穴を指す言葉であるが、後には広く十二経脈に所属しない経外奇穴（奇輸）をも指すようになり、本書でもそのような広い意味で使われている。本書著作の動機については、鍼灸の効果をあらわすため「諸書に挙げる所の奇輸の最も要なる者を撰み記して……初学者の司南となさんことを欲する」「諸々の奇輸……その所属するの経絡及び其の本穴を明らかにする」とある。ちなみに「初学者」云々は諺解書家としての著者の謙遜の辞にすぎない。本書は、わが国で最初に著された経外奇穴に関する総合的な書物であり、初学者の入門書ではない。

本書の大半を占める穴法の解説部分は、穴法の名称、典拠、典拠原文、当該穴法に関わる別の医書からの引用と補足、穴法に対する和文の注解、穴法図などから構成されている。収録されている穴法は一五一法である。直接の典拠としては、『素問』『黄帝明堂灸経』『鍼灸資生経』『玉龍賦』『神応経』『鍼灸聚英』『類経図翼』『神農鍼経』『千金方』『千金翼方』『居家必用』『玉機微義』『十薬神書』『医学入門』『医学捷法』並びに『素問』王冰注の十六種の資料が用いられている。一五一法中、六

法には出典が示されていないが、これはいずれも本朝灸法（我が国古来の灸法）といわれるものに属している。何らかの穴法図が付されているものは約三分の一の五十法にのぼる。なおこれらの穴法で指示されている鍼灸法は、大半が灸法で、何らかの形で鍼法が問題となっているのは六法程に過ぎない。

以上のことをふまえて、江戸期鍼灸における本書の意義について述べてみることにする。

本書の特質の一つは、言うまでもなく正経十二脈に所属しない経外奇穴の集大成である。我が国の近世鍼灸は、慶長年間頃を境として、従来の灸法中心の鍼灸から転じて鍼法の本格的な導入を行うとともに、経脈所属の穴（経穴）への関心を深めていった。ただ、そうした経脈所属の穴ではない穴の使い方は、中国はもちろん、日本でも古来から伝統があり、鍼灸の重要な要素を形成してきた。この時期に起こった経外奇穴への関心の理由は、経穴一辺倒の治療への反動のほか、江戸初期以来の多量の鍼灸関係和刻漢籍の刊行、そして直接的には『類経図翼』の影響と見られる。次に重要な点は、本書が江戸後期に至る灸法復権の一端緒であるということである。岡本一抱は既に貞享二年（一六八五）に匿名で『灸法口訣指南』という灸法専門書を刊行している。これは曲直瀬玄朔の『日用灸法』以来の本格的な灸法書だが、そこで対象となったのは、概ね十二経脈に属する穴であった。本書は『灸法口訣指南』の後を承け、それを補足するものとして著述されたと見られる。

以上の二点とも深く関わるが、江戸期において最も早い時期に本朝灸法の集成を行った書としての意義も大きい。その試みは更に三宅意安の『灸焫塩土伝』で大きく展開され、江戸後期に至って浅井南皋らの『名家灸選』として結実するのである。

（日本鍼灸研究会）